

あなたがたも気をつけなさい

（ルカによる福音書17：1～10、ヨシュア記24：14～18）

今朝は、ルカによる福音書17章1節から10節までの、私たちが目下礼拝で用いている新共同訳聖書では、「赦し、信仰、奉仕」と言う小見出しがついた個所が、説教のテキストになります。「赦し、信仰、奉仕」とは、本来独立した、主題の異なる、三つの資料を、ルカが無造作に、ここに一つに纏めて置いたように、一見見えるのですが、実は、そうではなく、三つは互いに緊密に関連しているだけでなく、この個所自体、全体として、直前の記事と深く結びついているのです。

この個所は、こう書き出されています。「イエスは弟子たちに言われた。『つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸だ』」。ここに出て来る”つまずき”の原語は、”スカンダロン”と言います。英語の“スキャンダル”の語源となったギリシャ語です。日本語では、“不名誉な噂”、“醜聞”、“不正な事件”、“汚職”等と訳されます。本来の意味は、“（鳥獣などを捕える）わな”のことで、それから、“つまずき”、“人に罪を犯させる（罪へ誘惑する）者”、或いは、“人に罪を犯させる物（その機縁、原因）”を意味する言葉となったのです。主イエスは、この個所の直前で、「金持とラザロ」の譬え話をなさいました。そして、金に執着し、他人の不幸には一切無関心で、憐れみの欠片（かけら）もないフェリサイ派の人々を、この金持ちに代表させました。彼は、死後地獄に落ち、反対に、極貧の中を生きたラザロは、死後天使によって天国に移され、立場が逆転するのですが、フェリサイ派の者にとっては、これは頗（すこぶ）る、不名誉な話です。

「人の不幸は蜜の味」と言われますが、弟子たちは、この話を聞いて、一瞬溜飲を下げ、日頃威張りくさっている彼らに対し、いい気味だ、と、密かに、ほくそ笑んだに違いありません。しかし、主イエスは、まるで弟子たちの心を見透かすように、「あなたがたも気をつけなさい」と、注意を促されるのです。人を笑ったり、非難している内に、何時しか、自分が何者であるか分からなくなってしまい、自分に対する注意がお留守になり、気付かぬ間に、人に、特に、信仰をもって間もない者に、大きな躓（つまず）きとなるようなことをやってしまう、と、言うことは、往々にして起こり得ることだからです。

主イエスは言われます。「つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である」と。コヘレトの言葉7章20節で、「善のみを行って罪を犯さないような人間は/この地上にはいない」と言われていることは、全く確かなことであって、人間を楽観視することはできませんし、楽観視は、却って、危険でさえあります。たとい、キリストによる罪の赦しに与ったとしても、以後一切罪を犯さない、と言う訳にはゆかないのです。地上に生きている限り、人は誰も、罪とは無縁ではあり得ず、ルターが言うように、我々の生涯は、日々悔い改めの連続とならざるを得ないのです。が、しかし、だからと言って、罪の中に居直り、そこに胡坐（あぐら）をかき、最早、反省も、努力も止めてしまうとすれば、それは、横着と言うもので、決して、許されることではありません。それでは、本能だけで生きている動物と何も変わらず、進歩も、発展も望めません。たとえ、遅々とした歩みであるにしても、今日よりは明日、明日よりは明後日と、進歩を願い、前進を図ろうとするところに、自由意志を与えられた、人間の人間たる所以があるのではないのでしょうか。そして、人間の高貴、尊厳もそこにある、と、言ってよいのではないのでしょうか。

この個所の背景には、紀元一世紀末の、教会が置かれた危機的状況が垣間見られる、と言われます。ローマからの迫害があり。ユダヤ教からも攻撃され、初期の熱狂は醒め、教会の信仰は弛緩し、指導者は情熱を失い、そんな教会の状況、特に、指導者の態度を見て、躓く者が続出したのではないのでしょうか。「これらの小さい者の一人をつまづかせるよりも、首にひき臼を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである」とは、随分厳しい叱責の言葉に聞こえますが、そこまで言わねばならぬほど、事態は深刻だった、と言うことなのでしょう。特に、教会全体の雰囲気として、互いに攻め合い、非難し合い、どこにも赦しのない、何ともギスギスした、いたたまれないような、そんな空気が充満していたのではないのでしょうか。そこで、ここでは殊更に、赦しが説かれることになるのです。こんな具合です。「もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい」と。先ず、罪に対しては、戒めるのです。そして、悔い改めを促すのです。見て見ぬふりをしたり、何も言わずに放置するのではないのです。罪は放置すればドンドン増殖し、そこがどこであれ、人の住めない所にしてしまうからです。悔い改めれば、赦すのです。でも、悲しいかな、人間そう上等にはできていないのです。分かっている、やっぱり同じ過ちを犯してしまう、それが人間です。一日に七回罪を犯し、その都度、「悔い改めます」と言っても、赦せ、と言うのです。一日に七回とは、七回まで、と言うことではなく、何回でも、と言うことの象徴的な表現です。「そんなことができるか。『仏の顔も三度まで』と言うではないか」と、言いたいところですが、実は、私たち誰もが、神にそうして頂いているお蔭で、生きておられるのではないのでしょうか。神にさせていただいているように、あなたもそうしなさい、と、そう言われているだけのことなのです。私たちは、主の祈りの第五の祈願で、「我らに罪を犯す者を、我らが赦す如く、我らの罪をも赦したまえ」と祈りますが、内容は、あれと同じことなのです。赦しのない所では、人間、本当のところ、生きては行けないのです。肉体を生かすのは空気ですが、魂を生かすのは赦しなのです。

しかし、そうは言われ、半ば、理解はできても、これを聞いた弟子たちは、驚き、慌て、余程の信仰がなければ、この要求にはとても応えられないと考え、「わたしどもの信仰を増してください」と、主イエスに懇願しました。私たちと同じです。人を赦すと言うことは、それ程に至難の業なのです。これに対し、主イエスは、「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう」と、言われました。弟子たちは、信仰と言うものを、大きいとか、小さいとか、量的に考えていたのです。しかし、信仰にとって大切なのは、量ではなく質なのです。それは、種に例えられますが、種に命が宿っていれば、それが、どんなに小さな種であっても、やがて大木になり得るのです。事実、からし種は、埃かと思えるほどの小ささで、ちょっと強い鼻息がかかっただけで飛んでしまい、どこに行ったか分からなくなってしまいます。私は何時も大木を見ると、これも、元は一粒の小さな種だったのだ、と考え、深い感動を覚えます。小さな種の、どこに、一体このような生命力が宿っているのか、私たちの想像力を絶します。それと同様、どんなに小さな信仰であっても、そこに神の命が宿っていれば、信じ難いことが起こるのです。「桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう」とは、そんなことはあり得ない、と思われることさえ、起こり得る、と言う比喩的表現ですが、確かに、神は天地をお造りになったのですから、それくらいことは、しようと思えば難なくおできになるのは、何も不思議ではありません。ジュネーヴの宗教改革者ジャン・カルヴァンは、信仰を定義して、「信仰とは、

自分が主人面をして、デンと収まっている心の座を、神に明け渡すことだ」と言いました。神の働きを遮らぬよう、自分を限りなく小さくし、神を限りなく大きくして、存分に神にお働き頂く、その時、神の力は十全に働き、信じ難いことが起こる、と言うことは、理屈から言っても、それは当然、と言えるのではないのでしょうか。

今日の箇所のテーマは、最初に赦し、次に信仰、そして最後は奉仕、と言うことになるのですが、信仰は、神を信頼し、神にお働き頂くことではあっても、神を自分に仕えさせるのではなく、自分が神の僕として神に仕えることに極まるのです。そこまで行かない信仰は、十分に実ったとは言えません。さて、その場合、どう言うことが起こるのでしょうか、それが最後に語られます。主イエスは、当時誰もが当然と考えていた奴隷制度から例を引かれます。ここで“僕”と訳されている原語、“ドゥーロス”は、普通奴隷と訳される言葉なのです。こんな話を主イエスがなされたのは、奴隷制度そのものを、無批判に肯定するためではなく、それが、当時、誰にとっても馴染みの事柄であって、これを例にとって話せば、誰もが直に理解できたからなのです。

或る人に奴隷がいて、彼が、畑か野原での一日の労働を終えて、家に帰って来た時、主人は、奴隷に対し、「休んで食事を摂りなさい」とは言わずに、直に、夕食の用意にかかり、自分のために給仕をするよう命じ、それが済んだら、食事を摂り、ベッドで休むがよい、と言うのではないかと、主イエスは問われます。奴隷も、それは重々承知しており、わざわざそんなことを言われなくても、その通りやったはずです。何故なら、奴隷とは、主人の所有物であり、元々金で買われたものだからです。主人から労を労わられることを期待したり、況してや、報酬を求める奴隷など、どこにもいません。奴隷にとって、主人に仕えることは当り前のことであって、それこそが彼の人生のすべてなのです。聞いている弟子たちも、それには、全く異論はなかったはずです。それは当然のことだ、と思ったに違いないのです。確かに、彼らが、自分を主人の立場に置いて、主イエスの話を聞いている間はそうでした。ところが、主イエスは、あなた方は主人ではなく、神に対しては僕、奴隷の立場なのだよ、と言われて、恐らく、ハッと我に返ったに違いありません。そこで、主イエスは、我に返った弟子らに言われるのです。「あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足らない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい」と。彼らは、心のどこかに、報酬を求める思いを残していたのでしょうか。少なくとも、自分たちのやってきたことを認め、評価し、何らかの形で、報いていただけることを期待していたのでしょうか。その典型的な例が、ファリサイ派の人々の生き方でした。彼らは、「わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています」（ルカ 18：12）と、神に対しても、何の恥じらいもなく、堂々と、自分を誇ることができました。でも、主イエスは弟子たちに言われるのです。「あなた方は、そうであってはいけない。命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足らない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい」と。それは、自分を誇るの見苦しいので、謙譲の美德を発揮せよ、と言う道徳的な戒めではありません。と言うのは、ここで「しなければならぬこと」と訳されている原語は、“オフエイロー”と言うギリシャ語で、その意味は、「借りがある」、「義務がある」、「負い目がある」と言うことで、私たちは神に対して、借りがあるのです。負い目があるのです。どんなに支払っても、支払っても、とても返せない負債を負っているのです。だから、どれだけやったところで、これで十分、と言うことにはならないのです。では、どんな負債、負い目かと言うと、私たちが罪から贖ってくださるために、神の御子イエス・キリストが、その命を代価として支払ってくださった、と言う負い目です。だから、何をやったところで、誇ることなど、でき

ないのです。報いは、もう十分、前もって受けているのです。キリストの弟子とされた者のすべての行動は、恵みを受けるためではなく、恵みを受けたそのお返しに過ぎないのです。だから、それは、感謝から始まる、言わば、感謝が結ばせる果実なのです。

今日は、聖書朗読の折り、旧約聖書からはヨシュア記24章13節から18節までが読まれました。あそこには、イスラエルの民が、約束の地カナンに定着した時、ヨシュアが、イスラエルの民に対して、「どの神に仕えるか。自分で選びなさい。ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます」と言ったところ、彼らもまた、「わたしたちも主に仕えます。この方こそ、わたしたちの神です」と答えた、と言うことが記されていました。彼らは、出エジプト、荒野の40年、カナン定着と言う、大きな恵みに与かった主なる神を、これ以外に仕えるべきお方はない、と、心底そう信じ、告白したのです。ところで、ここに繰り返して出て来る“仕える”と言う原語は、“アーバド”と言うヘブル語なのですが、これを名詞にし、“エベド”と言うと、奴隷と言う意味になるのです。だから、ここで“アーバド”、“仕える”と言うのは、「奴隷として仕える」と、言うことなのです。でも、それは、人から強いられて、そうするのではなく、自ら進んで、喜んでそうするのであって、先ず、先に、豊かな恵みに与かったからこそ、そのようなことをなし得たのです。

新約聖書を代表するパウロもまた、自分を、「キリスト・イエスの僕(ドゥーロス、即ち、奴隷)」(ローマ1:1)と名乗り、生涯、粉骨砕身、キリスト・イエスのために働き通しました。それは自他共に認める所で、彼は、コリントの信徒への手紙15章10節で、「わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働いてきました」と、言うことができました。でも彼は、そう言いながら、「しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」と言うことを、忘れませんでした。彼を突き動かし、誰よりも多く働かしめたのは、神の恵み以外の何物でもないことを、彼は、片時も忘れず、まだ足りない、まだ足りない、と言う思いで、生涯生き通したのです。

恵から恵みへ、私たちの信仰の歩みも、そうありたいと願わずにはおられません。

(三輪恭嗣)